紀貫之「袖ひちてむすびし水」の解釈

隋　源　遠

はじめに

『古今和歌集』二番歌の「袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つ今日の風やとくらむ」の解釈をめぐって、「夏冬春」の季節を表す「三季の心」の説が古来根強く存在しているが、後述の「古今余材抄」が指摘したように、「袖ひちてむすびし水」を夏とする根拠は不十分である。しかし近代の諸注釈はこの説を無批判に扱うことが多く、契沖の指摘を更に発展させることはなかった。そこで、契沖説の可否を判断するために、「三季の心」の説が成立する背景の検討、および「むすびし水」を季節の観点から分析することで、「袖ひちてむすびし水」が去年の春の思い出であることを論ずる。

一、問題の所在

袖ひちてむすびし水のこほれるを春たつけふのかぜやとくらむ

むすびし夏、こほれる冬、春たつ季也。袖ひちて、ひたしてと云也。故人好詠歟。（傍線筆者、以下同）[1]

右に挙げた内閣文庫本「古今集注（伝冬良作）」は「三季の心」の説（以下「三季の説」と略称する）を唱えた注釈書の中で比較的に早い時期のものである。これは頓阿の古今説に、竺源恵梵すなわち師成親王が自らの注説を書き加えた注釈書である。[2]頓阿は為世門下の和歌四天王の一人であって、二条流古今伝授の正統を受け継いだ人物である。その系譜は十五世紀後期に二条堯恵流古今伝授と二条宗祇流古今伝授に分かれ、更に宗祇流から御所伝授と地下伝授が生まれ、近世まで至った。現在見られる「三季の説」を主張するほとんどの注釈書はこの系統のものである。一方、非二条流のものとして、比較的に早い時期に「三季の説」を唱えた注釈書は「毘沙門堂本古今集注」（以下「毘沙門堂注」と略称する）などがあげられる。現存の中世の注釈書の中に、「三季の説」を明確に否定する説は見当たらないが、永正年間に成立した諸注集成の性格を持つ「永正記」には、次のような記述がある。

袖ひちて結びし水のこほれるを春たつけふの風やとくらん

此哥、元日によく叶へり。月令云、立春ノ日東風解氷といへる心也。此哥三季をよめる也。四季と云儀用之ト云一説あり。（中略）此哥三季を詠と云事無也と云人有。如此用捨心に懸テ思へとの事也。[3]

右の傍線部のように、契沖以前において既に「三季の説」に対する反対意見があったが、その具体的内容については不明である。

「三季の説」に対して、適切な根拠をもって鋭い疑問を投げ掛けたのは国学者契沖である。

或説に夏よりの事をかけていへるはあまりにふかき心をいひつけんとての後の人のしわさ也。かほをあらひ手をすゝくには冬も水をむすはぬ事かは。土左日記に

手をひてゝ寒さもしらぬいつみにそくむとはなしに日比へにける

これは二月五日の哥也。もし夏をかけてよめる歌ならは、顕昭のさも釈せられざりけれは、定家卿注しそへ給ふへきを、此歌の心ことにこもれる所なし。不レ可レ有二自-他之説 とのみかゝれたるにてこゝろうへし。[4]

契沖は「古今余材抄」（以下「余材抄」と略称する）において、「三季の説」を過去の人々の思い込みとし、その根拠として、『土佐日記』の歌を引用し、水を掬うという行動は夏に限る行為ではないと主張している。自説を証明するために、「顕注密勘」において、水を掬う表現を夏とする解釈なく、また藤原定家も「此歌の心ことにこもれる所なし」と説いて、顕昭の説に賛同したことを指摘している。

しかし契沖のこの説に対して、藤井高尚の「古今和歌集新釈」（以下「新釈」と略称する）は次のように反論した。

余材抄に「むすびし水」とは夏よりの事をかけていへるにはあらず。顔をあらひ手をすすぐには冬も水をむすばぬ事かは。といへるは「袖ひぢてむすびし」と云詞のさまをも歌の情をもえ見しらぬ説なり。[5]

傍線で示したように、「新釈」は「余材抄」が歌の心を分かっていないと反論しているが、契沖が挙げた『土佐日記』の歌については触れていない。しかし「袖ひちてむすびし水」が夏季であることを自明のこととして、他季の可能性について中世から近世までのすべての注釈書は言及していない。それに比べて、契沖が貫之歌を挙げて反論していることは当然と思えるが、近代以降の諸注釈においても、契沖のこの説はそれほど重視されてこなかった。[6]「三季の説」が中世に生まれた背景に何があるのか、そして契沖説の発展的解釈は可能なのか。この二つの問題を追究することで、貫之の名歌「袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つ今日の風やとくらむ」の従来の解釈を再検討する必要が生ずる。

二、「三季の説」の成立と納涼詠

「三季の説」及びその延長として見うる「四季の説」[7]が説かれている主な中世注釈書を挙げると、「毘沙門堂注」、「耕雲聞書」、内閣文庫本「古今集注（伝冬良作）」、「冷泉持為注」、「古今和歌集両度聞書」（以下「両度聞書」と略称する）、「古今集延五記」、「古今栄雅抄」、「伝心抄」、「教端抄」などがある。前述したように、頓阿以下の堯恵流及び宗祇流古今伝授において「三季の説」が特に目立っているので、その流れをまず考えてみたい。「三季の説」は『古今集』歌学伝授のどの段階で発生したのか。現存の資料によると、少なくとも藤原定家から二条為世までの段階で、「三季の説」を説く注釈書はない。例として、「僻案抄」と「六巻抄」を見てみよう。

ひちてとは、ひたしてといふ心也。この詞、昔の人このみよみけるにや。古今には、おほく見ゆ。後撰には、すくなし。今の世の歌にはよむべからずとぞ、いましめられし。
（「僻案抄[8]」）

万葉ニハ漬ト云。ムスビシハ酌ナド云心也。月令云、立春日東風　文字消也。

袖ひちてむすびし水、袖ヒタシテ也。御抄云（「僻案抄」筆者注）、ヒチテトハ、ヒタシテト云心也。此詞、昔ノ人ノコノミヨミケルニヤ。古今ニハオホク見ユ。後撰ニハヒトツフタツアルニヤ。今ノ世ノ哥ニハヨムベカラズトゾイマシメラレシ。
（「六巻抄[9]」）

古来風体抄ニモイマシメラレタリ

右に挙げたのは藤原定家の「僻案抄」と行乗法師の「六巻抄」である。「六巻抄」は「為世と定為法印によって述べられた為家以来の二条家の家説を、行乗法師が聞書してまとめたもの[10]」であり、二条家を代表する注釈書である。前後の両文を比較すると容易に気付くのは、片桐洋一氏が指摘したように、「六巻抄」の「最も顕著な特色は、定家がその家説・庭訓をまとめた「僻案抄」のすべてを引用している[11]」ことである。これらによれば、定家から為世までの伝授の中には「三季の説」はなかった。また和歌四天王の一人である浄弁が為世より伝授された注説をまとめた注釈書「浄弁注[12]」に「三季の説」がないことも、初期の二条流においては「三季の説」が問題になっていなったことを表していよう。そのほか、「僻案抄」と「六巻抄」の内容と極めて近い注釈書として、藤原盛徳の「古今秘聴抄[13]」や北畠親房の「古今集注[14]」などがあげられる。例として北畠親房の「古今集注」を挙げてみよう。

袖ひちてハ、ひたしてと云也。定家卿の口伝には、昔の人の好ミよミてるにや、古今には多〔く〕ミゆ、後撰には少し、今の世の哥には不レ可レ詠とそ誡られしと、云々、是は父俊成卿の誡られける詞也、

以上の三例を見ると、貫之歌に対する注は「ひちて」のみであることが分かる。しかも注釈の構成も同じである。まず「ひちて」の解釈、そして『古今集』の歌人が好んだ表現であるこ

とをいい、最後は『後撰集』に少ないと説いている。これらによると、初期二条流正説には「三季の説」が問題とされていないことは明白である。

「三季の説」が二条流注釈として登場したのは、おそらく内閣文庫本「古今集注（伝冬良作）」の辺りではないかと考える。しかしその構成を分析してみると、今までの二条流の説である「ひちて」の解釈の前に「三季の説」を加え、後に東風解凍説を添えた形となっている。この中で見られる「三季の説」は何処から来たのか、この点について考えたい。

内閣文庫本「古今集注（伝冬良作）」の性格に関して、片桐洋一氏が親房流古今注を土台にする説と頓阿流古今注を土台にする説との二説を示した。[15] しかし「三季の説」に関しては「北畠親房注」には見られない。一方、深津睦夫氏はこの注が頓阿注を基本としたものであるという根拠が弱いとした上で、その大部分は師成親王が書き加えたものと推定している。[16]「むすびし水」の歌の注を見ると、確かに鳥井千佳子氏や深津睦夫氏が指摘したような諸注集成の色彩が感じられる。「東風解凍」の説に関しては、「顕注密勘」に見られるほか、「六巻抄」の傍注にもある。「三季の説」については、先述したように二条正流の注釈の中にはないので、同時代或いはそれ以前の他流の注釈から引用したものと考えられる。その可能性として、現存の古注の中では鎌倉末期から南北朝期にかけて成立したという「毘沙門堂注」が一番高い。内閣文庫本「古今集注（伝冬良作）」と「毘沙門堂注」の内容を比較してみると、両注の類似性は容易に発見できる。

紀貫之　凡十或七九前内裏一廋一。于時御書所預。後為木工頭従五位上。童名、内教坊阿子久曽。

袖ひちてむすびし水のこほれるを春たつけふのかぜやとくらむ

むすびし夏、こほれる冬、春たつ季也。袖ひちて、ひたしてと云也。故人好詠歟。

此集多有之。後撰には少し。今世不可詠之由、定家卿口伝有之。俊成庭訓也。春立けふの風やとくらむ、月令、東風解凍と云心也。

（内閣文庫本「古今集注（伝冬良作）」）

註曰

○春立日者延喜三年正月三日也此哥一首ニ三季ヲヨメリ春立ハ春也袖漬ハ夏也コホレルハ冬也（中略）

○于時御書所預延喜六年任越前権掾後仍従五位上木工権頭　天慶九年卒　童名内教房阿子久曽哥九十七首其中短歌一首旋頭一首　○楽云内教房内裏ニ有也○或人云吾子（アコ）○此哥東風解凍文也　○貫之哥正本九十七首而如御本ハ忠峯哥一首貫之哥ハ九十八首如目六賀部貫之三首也而如此本ハ一首也若定国賀屏風哥中貫之哥有二首歟九十九首也除忠峯之外也

（「毘沙門堂注」[17]）

両注を比べて容易に気づくのは、歌人紹介、「三季の説」、東

風解凍説などにおいて、両注は共通している点である。ちなみに、歌人紹介の部分に関しては、清輔本「古今集勘物」もほぼ同じ内容が確認できる。ところが、傍線部の貫之歌の数に注目してみると、清輔本「古今集勘物」の「九十五首。其外短哥一首・旋頭哥一首」[18]、つまり九十七首説のみをあげるのに対して、内閣文庫本「古今集注（伝冬良作）」は「九十或七九首」、つまり「九十七首あるいは九十九首」の二説を上げている。筆者の調査によると、内閣文庫本「古今集注（伝冬良作）」より前の注釈書の中で、九十七首説と九十九首説を同時にあげたのは、「毘沙門堂注」しかない。このようにみれば、師成親王が「毘沙門堂注」あるいはその内容と近い注釈書を見た可能性は高いと思われる。内閣文庫本「古今集注（伝冬良作）」と「毘沙門堂注」の類似点から考えると、後の宗祇流、堯恵流古今伝授の中で重んじられた「三季の説」は、定家から為世への二条流正説ではなく、非二条流の「毘沙門堂注」による注説である可能性が高いと思われる。

さて、片桐洋一氏によると、「毘沙門堂注」は「六条流の末流ともいうべき知家・行家の流で伝えられてきたものを、（中略）二条正流とは距離を置くポーズをとり、そしてそれゆえに京極為兼に好意を抱く人物が今の形にまとめあげたもの」[19]と推定されている。しかしいうまでもないが「三季の説」は「顕注密勘」にないものである。したがって「三季の説」を六条家説とする根拠はない。ここで注意したいのは、片桐氏が指摘した「毘沙門堂注」が持つ「和歌秘伝」の性格である。氏が背景に「和歌秘伝」が想定されるとした注釈[20]には、「註曰十日付十事情」の形式の記述が多い。この特徴を念頭に置いて「むすびし水」の歌注を見ると、「三季の説」の前にある「註曰〇春立日者延喜三年正月三日也」という誤った記述が注目される[21]。つまり「毘沙門堂注」に見られる「三季の説」は「和歌秘伝」である可能性が高い。

問題は少し複雑になるが、前述した内閣文庫本「古今集注（伝冬良作）」の後、新しい注説が「冷泉持為注」の中で登場する。それは「四季の説」である。

又俊頼説には、此哥は四季を読と也。其故は、袖ひちて結は夏也。水の氷れるは冬也。春立はもとより春也。むすびしのしの字にて秋をおもはへたりとや。[22]

傍線部で示したように、「四季の説」は「三季の説」と比べて、「秋」以外の部分はまったく同じである。ここでは源俊頼説に仮託されているが、「四季の説」はやはり「三季の説」の延長として見るべきではないか。後この説は「古今集延五記」を始めとする堯恵流古今伝授によって継承された。しかし宗祇流古今伝授の中でしばしば批判の対象として挙げられ、その後堯恵流の衰退とともに古今伝授の舞台から消えた。

一方「三季の説」を継承した宗祇流古今伝授は中世から近世までの数百年間大きな発展を遂げた。「三季の説」が宗祇流古今伝授の隆盛とともに、「むすびし水」の歌の揺るぎない解釈として確立した。しかし「三季の説」がなぜここまで不動の地位を確立できたのか。貫之の歌を見てみると、確かに冬と春の

心は明白ではあるが、夏を示す確実な証拠は見当たらない。その問題を解くために、「三季の説」を主張する注釈を抜粋してみよう。

むすびし水とは夏の水を翫ぶ心也　（「耕雲聞書」[23]）

袖ヒチテハ夏納涼也　（「古今和歌集三条抄」[24]）

夏ノ間ハ水ヲ愛スル物也　（「伝心抄」[25]）

右に挙げた諸説を見ると、すべての解釈が「袖ひちてむすびし水」という行動を「納涼」として解釈している事が分かる。つまり「結びし水」がもたらす納涼のイメージは当時において広く共有されていた可能性が高い。実際、中世における納涼詠の中で「水を結ぶ」（水を掬う）という表現はよく使われていた。著名な歌集からいくつかの用例を挙げると、

おなじ大嘗会主基方屏風、増井納涼の人あり　従二位隆博

すずしさをます井のし水むすぶ手にまづかよひくる万代の秋

（「風雅集」賀　二二一〇）

樹蔭納涼

日比よりくち木の柳かげあさみむすぶし水ぞぬるく成りぬる

（「為尹千首」夏百首　二九八）

水辺納涼

夏ぞなき千代のよはひもひさごもてむすぶに清き玉の泉は

（「雅世集」七四四）

などがある。右の例が示すように、中世の納涼詠の中では水を掬うという意味での「むすぶ」が一般的に使われている。「三季の説」が中世から近世までの多数の古今集注の中で重んじられた要因の一つはまさにこれである。古今集の諸注釈において「袖ひちてむすびし水」を夏とする理由には、こういった「むすぶ」が中世納涼詠の中で多く使われている背景があると思われる。それゆえに、高尚が契沖の斬新な意見をものともせずに「歌の情をもえ見しらぬ説」として否定したのであろう。しかし実際、中古においても中世においても「むすびし水」（水を掬う）という表現が夏あるいは納涼に限定された事はなかった。中古の例に関しては次節に譲るが、中世の用例を一つ挙げると、

立春

君がため結ぶつかさの若水にけふや氷のとけはじむらん

（「公賢集」七四四）

がある。これは水を掬う、立春、そして東風解凍を一首に読み込んだ好例である。このように見れば、貫之の立春詠の中にある「むすびし水」を夏の行動として解釈することは、契沖の言うように「後の人のしわさ」である可能性が高いと思われる。

三、「むすびし水」の季節性

貫之の歌にある「むすびし水」の意味を考えるために、彼が活動する時代を中心に中古の和歌における水を掬うという表現の季節性を検討する必要がある。

先ず夏の納涼詠で詠まれた例を紹介したい。それに関する先行研究として、既に岩井宏子氏の「納涼詠の生成――新歌材の受容と展開」[26]がある。氏が和漢比較研究を通じて、日本漢詩より「和歌の世界での「納涼」の受容は緩慢であった。『拾遺和歌集』の夏部に至ってようやく納涼歌群が登場することとなる」と指摘し、その上、貫之の立春詠を「『古今集』の中で唯一暑さを避け「涼」を求めている様子を叙述したもの」としながら、「『古今集』において夏の景物としての「納涼」が歌のテーマになっているものはない」と結論付けた。[27]氏があげた納涼詠の用例の中から水を掬うという表現が含まれた作を挙げると、『後撰和歌集』の歌人中務と『拾遺和歌集』の歌人源順の歌がある。

いづみ
したくくる水に秋こそかよふらしむすぶ泉の手さへ涼しき
（「中務集」四〇）

人の家の泉のつらにすずむ
山の井をかつ結びつつ夏衣ひもうちとけてすずむころかな
（「源順集」二〇七）

平安時代の古いものとしてはこの二首があげられ、数自体は多くない。

次は貫之の時代に見られる、季節性がはっきりしない作である。

志賀の山越えにて、石井のもとにて、物言ひける人の別れける折によめる
結ぶ手のしづくに濁る山の井のあかでも人に分かれぬるかな
（「古今集」離別　四〇四）

岩くぐる山井の水をむすびあげてたがため惜しきいのちとか知る
（「伊勢集」四二四）

山水を手にむすびてもこころみむぬるくは石の中もたのまじ
（「伊勢集」四三八）

世の中心細く常の心地もせざりければ、源公忠朝臣のもとにこの歌をやりける、このあひだ病ひ重くなりにける
手に結ぶ水に宿れる月影のあるかなきかの世にこそありけれ
（「貫之集」八八八）

『古今集』四〇四番歌の季節は明確ではない。『古今集』における「志賀の山越」に関連する歌を見ると、春、秋、冬の

部に入っている歌はあるものの、夏の部にはない。[28]『貫之集』八八八番の歌について、渡辺秀夫氏が「例によっていかにも貫之らしくことわり強く冠された〈手にむすぶ水に宿れる月〉という歌句もまた、「安寝北堂上。明月入我牖。照之有余輝。攬之不盈手」（『文選』巻三〇・陸機・擬古詩）、「山人見月寧思寝。更掬寒泉満手霜」（金立之・峡山寺翫月・『千載佳句』〔月〕）、「掬水月在手。弄花香満衣」（唐・于良史・春山夜月）などにみえる漢詩の秀逸で洒落た趣向の利用に出るものとみなしてよいであろう。[29]」と指摘している。氏が上げた三首の詩の季節に注目すると、いずれも夏あるいは納涼とは無関係な作と思われる。

『伊勢集』の二首の恋歌[30]における水を掬うという行動に関しては、はっきりとした季節性がないことは間違いないであろう。したがって以上の四首は季節性がはっきりしない歌として分類する方が妥当だと考える。

最後に注目したいのは、今までの注釈書がほとんど注目しなかった春歌の中にある水を掬う表現である。

天暦御時、御屏風歌、立春

けふとくる水にかけてぞむすぶらしちとせの春にあはんちぎりを　（「源順集」一六四）

先掲した二〇七番歌の納涼詠で水を掬うという表現を使った源順だが、彼の納涼詠よりはむしろこの歌の方が貫之の立春歌を踏まえているのである。この歌において立春、東風解凍そして水を掬うという表現が貫之の歌の影響を受けていることは確実であろう。

時代をやや下ると、始春（立春あるいは元日）の水を掬うという表現に新たな意味を加えた歌が現れた。

堀川院の御時、立春のあしたに、けふの心つかふまつるべきよし侍りければ奏し侍りける　源俊頼朝臣

君がためみたらし河を若水にむすぶや千代のはじめなるらん　（「千載集」賀　六一〇）

ついたちの日　家良

いつしかと池のこほりのけさはまたとくればむすぶ春のわかみづ　（「新撰六帖」第一帖　一三）

これらの歌に詠まれた「若水」はもともとは立春の日に主水司が天皇に奉った水で、平安時代には宮中行事として行われていた。歌ことばとして登場する時期はやや遅いが、若水を汲む行事は既に『延喜式』巻四十の主水司の次の条から確認できる。

択二宮中若京内一井堪レ用者一定。前冬土王。令二牟義都（ムキツ）首（オトヲ）清治（キヨメ）一即祭之。至二於立春日昧旦一。牟義都首汲レ水付レ司擬二供奉一。一汲之後廃而不レ用。[30]

瀧川政次郎氏によると、「この天皇・中宮・東宮の御生気御井から立春の日の早朝に汲む水が、爰にいう立春水であって、

立春水より転化したものが、正月一日の早朝に汲む若水である[31]」という。『延喜式』では井戸水であったものが、前掲のように、後の時代になると、一的に若水は立春あるいは元旦に汲んだ水という意味に変化した。しかし立春の水を汲むことがめでたい点においては、貫之の時代にも同じであろう。また、古代中国の立春習俗の中にも立春の水を汲むという行事がある。唐代の月令式農書『四時纂要』正月の部には、

立春日、貯レ水、謂二之神水一。釀レ酒不レ壊。[32]

という記述がある。同じ記述は南宋の『歳時広記』にも見られる。日中両国において立春の水が特別視されることは、これによって証明されるであろう。さて、以上の資料に基づいて、貫之の歌の解釈を考えてみたい。確かに納涼詠に見られる水を掬うという行動は風流であるが、それを立春や東風解凍と直接関係づけることは難しい。しかし毎年掬うめでたい立春の水なら、そういったような問題は生じない。もちろん、貫之が掬った水は『延喜式』に見られる井戸水ではないけれど、『古今集』の歌人たちにとって、東風解凍は「あの素晴らしい春の水との再会」でもある。『古今集』の中で春の水は桜や梅ほど多く読まれていないものの、源当純の「谷風にとくる氷のひまごとに打ちいづる浪や春の初花」（春上・一二）があるように、賞翫される対象であることは間違いない。それに対して、夏歌の中で水を詠む作は一首もない。この点から見ても、貫之歌にある「むすびし水」を春の行動として考えたほうが自然と思われる。またその素晴らしい水を汲むことが『礼記』月令の条を髣髴させ、歌人に東風解凍を実感する喜びをもたらす。それゆえに、新しい春が来るたびに春の水を掬った記憶が蘇えり、歌人の心に感興を催させたのであろう。

四、結　論

貫之の歌における「むすびし水」の表現を去年の立春の出来事とすれば、歌の解釈も大きく変わってしまう。今まで「三季の説」が一般的であったが、私はこの歌を「去年の春の思い出の蘇生」という意味で解釈を試みたい。

去年の春風によって解けた水を掬う時の楽しい思い出は、冬の寒さに凍った水とともに凍結してしまった。しかし立春を迎えた今日、東風が吹いてあの氷を溶かしてくれるでしょう。一冬に凍っていた私の楽しい思いも、あの氷と一緒に解るのでしょう。またあの春の清水が掬えると思えば。

「三季の説」の場合、解ける立春の水の題材に対して、どうしてそれと関係が薄い夏の納涼の思い出が蘇ったかについては解釈が難しい。しかし「去年の春の思い出の蘇生」という捉え方によって、「三季の説」で生じたような不自然さもなくなり、歌の抒情の一貫性も強まる。また典故を踏まえた迎春の喜びも、より一層味わえることができるのではないかと考える。

注

（1）深津睦夫『古今集古注釈書集成 浄弁注 内閣文庫本古今和歌集注』（笠

間書院、一九九八年）。

(2) 同前、三三五頁。なお本注の成立事情は複雑であり、詳しい内容は次節を参照。

(3) 片桐洋一『中世古今集注釈書解題六』（赤尾照文堂、一九八七年）。

(4) 池田利夫他『契沖全集　第八巻』（岩波書店、一九七三年）。

(5) 『古今和歌集新釈（復刻版）』（風間書房、一九八九年）。

(6) 近代において出版された『古今集』注釈書を調べた結果、この問題について言及したのは小町谷照彦氏の「古今和歌集評釈　二　袖濡ちてむすびし水の」（『国文学』二八巻三号、一九八三年）のみであるが、契沖の説についての批判はない。

(7) 「四季の説」については後述する。

(8) 久曽神昇『日本歌学大系　別巻五』（風間書房、一九八一年）。

(9) 片桐洋一『中世古今集注釈書解題三（下）』（赤尾照文堂、一九八一年）。

(10) 片桐洋一『中世古今集注釈書解題三（上）』（赤尾照文堂、一九八一年）一五頁。

(11) 同前、一三頁。

(12) 注（1）を参照。

(13) 新井栄蔵『曼殊院蔵古今伝授資料二』（汲古書院、一九九一年）。

(14) 白山芳太郎『神道大系論説編　十九』（神道大系編纂会、一九九二年）。

(15) 片桐洋一『中世古今集注釈書解題三（上）』九五頁、片桐洋一『中世古今集注釈書解題六』三〇頁。なお内閣文庫本「古今集注（伝冬良作）」に関して、鳥井千佳子氏の「頓阿の「古今集注」追尋」（『鴨東論壇』第一号、一九八五年）において論及がある。

(16) 注（1）を参照。

(17) 吉澤義則『未刊国文古注釈大系　第四巻』（清文堂、一九六八年）。

(18) 片桐洋一『毘沙門堂本古今集注』（八木書店、一九九八年）。

(19) 日本古典文学会編『復刻日本古典文学館　第一期　清輔本　古今和歌集』（日本古典文学刊行会、一九七三年）。

(20) 片桐洋一『毘沙門堂本古今集注』解題一八頁。

(21) 同前、一九～二三頁。

(22) 湯浅吉美『日本暦日便覧』（汲古書院、一九八八年）によると延喜三年の立春は正月元日である。

(23) 田野慎二・山崎真克『翻刻平安文学資料稿　第三期　第二巻』（広島平安文学研究会、一九九六年）。

(24) 耕雲聞書研究会『古今集古注釈書集成　耕雲聞書』（笠間書院、一九九五年）。

(25) 徳江元正『古今和歌集三条抄』（三弥井書店、一九九〇年）。

(26) 伝心抄研究会『古今集古注釈書集成　伝心抄』（笠間書院、一九九六）。

(27) 岩井宏子『古今的表現の成立と展開』（和泉書院、二〇〇八年）。

(28) 同前、六五頁、七二頁。

(29) 『古今和歌集』の春下一一五、一一九、秋下三〇三、冬三二四などがその例である。

(30) 渡辺秀夫『平安朝文学と漢文世界』（勉誠社、一九九一年）一四三頁。

(31) 黒板勝美新訂増補『国史大系　第二十六巻』（吉川弘文館、一九七五年）。

(32) 瀧川政次郎『日本社会経済史論考』（日光書院、一九三九年）六八三～六八四頁。

中村裕一『中国古代の年中行事　第一冊』（汲古書院、二〇〇九年）。

〔引用和歌の依拠本文〕

『古今和歌集』の引用は片桐洋一『古今和歌集全評釈』（講談社、一九九八年）、そのほかの引用は『新編国歌大観』CD・ROM版（角川書店・一九九六年）によるものである。

（ズイ　ゲンエン　筑波大学大学院博士課程
人文社会科学研究科　日本文学）